

「観光・コンベンション都市松山の課題と展望」

～道後温泉を活かした街づくり～（要旨）

1. 問題意識

昨年（平成 11 年）の松山市の入込観光客数は、しまなみ海道の開通効果により 600 万人を突破し、道後温泉は大好況を享受した。しかしながら、道後の宿泊客数は瀬戸大橋の開通時に及ばず、また主要観光施設の来訪者数も全体の入込客数の伸びを下回るなど、外部要因に頼った観光振興には限界が見え始めている。今後は大規模なイベントが期待できなくなる中、松山が独自の価値を見出し、魅力を高めていく必要がある。本レポートは、松山の観光・コンベンション都市としての実力を客観的に評価した上で、道後温泉を活かした松山の集客力アップに向けた具体的な提言を試みるものである。

2. 観光の経済効果と温泉地の動向

観光は、地域にとって重要な産業であり経済波及効果も大きい。景気の低迷などに伴い国内旅行は伸び悩んでいるものの、温泉浴については根強い需要が見込まれる。一方で、温泉地間の競争は激化しており、架橋効果の剥落後は道後も他の温泉地と同じ運命をたどるおそれがある。

3. 観光都市松山と道後温泉の評価

観光都市としての松山は、大都市と温泉が例になく近接している・気候が温暖で雨が少なく、といった強みを有する。一方で、道後温泉を他の温泉地と比較すると、本館を中心とした温泉情緒は評価が高いものの、主要需要地からの交通アクセス・温泉周辺の観光資源・団体比率・個々の旅館の質などの点で課題も多く、現状のままでは安泰とは言い切れない。

4. コンベンション都市としての松山

コンベンション都市としての松山は、他の都市と比較して、空港からのアクセスが良い、大規模な会議施設が充実している、などの利点は認められるが、分科会・懇親会・シングル宿泊等の施設需要に十分対応できていないほか、観光を中心としたアフターコンベンションが弱い、といった問題点がある。

5. 道後温泉を活かした観光・コンベンション振興への提言

松山が道後温泉を観光・コンベンションの振興に活かすためには、以下のような施策が必要である。

(1) 観光の振興に向けて

道後温泉の機能向上

- ・道後温泉本館のアメニティ向上と観光への対応強化
- ・旅行需要の多様化に対応した、温泉旅館のリノベーション
- ・温泉街周辺の「明治」イメージへの特化

周辺観光の充実

- ・温泉施設の活用～内湯巡り～
- ・砥部焼窯などの「体験型観光施設」の誘致
- ・道後温泉と中心市街地の連携
- ・内子・大洲など県内の観光地との連携

(2) コンベンションの誘致に向けて

- ・分科会、懇親会、宿泊などへの温泉旅館の活用
- ・広告宣伝、誘致活動の強化
- ・交通アクセスの改善（フリーゲージトレインの導入など）
- ・国際会議への対応強化



日本政策投資銀行